



密を避け例年より参加者を制限して開催した通信員総会

11月15日に開催した2020年度通信員総会で、日本マスコミ文化情報労組会議（MCC）の北健一事務局長（ジャーナリスト）が「ウソと分断に抗して・コロナ下で何を伝えるか」と題して講演しました。講演の前半で米国のトランプ大統領のフェイクニュース攻撃により、世論が分断されてきたことが、日本でも同様に大阪都構想についての大阪市財政局の試算の報道や、菅官房長官（当時）の記者会見で東京新聞の望月衣塑子記者への質問妨害などにあらわれていることを指摘し、弱い人の立場に立った報道をするために記者会見で自由な質問をめざすMCCの取り組みを話しました。分断に対してマスコミや機関紙はどうあるべきなのかについて話された内容を2回に分けて紹介します。（次回はけんせつ342号に掲載予定）（文責・見出しとも編集部）

ウソと分断に抗してコロナ下で何を伝えるか①

ジャーナリスト 北健一

問われるマスコミのあり方

チェックすることが仕事

安倍首相が退陣されて、菅さんが首相をされていますが、菅さんになってから首相としての公式な会見は就任時の30分だけです。あとは選ばれた2社か3社だけが質問できて他の人は控室でモニターを見ているという不思議なやり方とか、パンケーキ屋に記者を集めて非公式の懇談をする。いずれにしてもそういう



北さん

たパフォーマンス的なことは何度かされていますが、肝心の記者会見は1回しかしていません。加藤官房長官の会見は参加している人を割と広く指すようになったという点では、菅時代より少し改善している感じがしますが、内容的にちゃんと答えていない場合が多いという点は残念ながら引き継いでいます。

今マスコミのあり方という

のがすごく問われてきています。例えば検察幹部と新聞社

の社員が賭け麻雀をしていた。コロナでみんな密は避けましょう、外出は控えましょうと言われていた最中ですが、コロナの緊急事態の最中ではなかったとしても、何で検察の幹部と新聞記者が仲良く賭け

目的と手段が転倒

権力との付き合い方

またパンケーキの懇談も何でそんな所にこの行っ

て、首相と一緒に食べているのだとお叱りをたいいいた



9月16日の菅首相記者会見、出典：首相官邸ホームページ（<http://www.kantei.go.jp>）

くらいであれ
ば何の意味もないのでは
ないか。マスコミと権力との付き合い方というか、距離感が問われるべき出来事が続いている。これは考えなければいけないことだと思えます。

きました。政治家も忙しいので記者会見などでも一人一問しか聞けなかったり、ちょっとしか話せない。食事をしながら話をするというのは割と長く本音を聞き出す機会とされてきており、私個人としてはそれを全否定するのも難し

いかなという気がしなくもありません。
ただ目的と手段が転倒しており、パンケーキ屋にすごく大勢の記者が行って、しかもオフレコ懇談だから一行も書けない。3〜4人で菅さんを囲んであれこれ話すのであれば、すぐ書けなくても本音が聞けていいかなと思います。が、100人がずらっと菅さんを囲んでいて、菅さんが皆元気と言って手を振っている

社交クラブ維持優先 社会の変化についていけず

エッセイ
ストの小島慶子さんが「賭け麻雀の問題と、セクハラの問題と、記者会見形態化の問題は、全部地続きである。内輪の論理、いわばメディア社交クラブ

は検察と仲がよかったり、政治家と仲がよかったり、一緒に賭け麻雀したりしている。記者会見でも身内でうまくやっている。
そこに東京新聞の望月衣塑子さんみたいな異分子が入ってくる、その異分子をみんなでいじめようとしている。あるいは排除しようとしている。さらに取材の中でセクハラも起る。でもセクハラが起っても新聞記者は本気でそれをやめさせようとしていない。そうした問題は繋がっているのではないかと、これを小島さんは指摘しています。が、これは非常に大切な指摘だと思えます。

同じことを東大の林香里先生は「多様性のない取材・編集現場は、社会の変化についていけず、世間から乖離し、社会的意義を失っていくだろう」と指摘していますが、これも非常に大切な指摘だと思います。

うことが、今、結構深刻に議論されています。

欠けているのは多様性

働き方改革も必要

そして女性に関わる課題が新聞記事になかなか載りにくい、テレビのニュースに載りにくい理由の一つも新聞社、テレビ局における多様性の欠如が原因ではないか。もちろん女性の編集幹部とか今どきいるわけですが、多くの場合、しばらく前まではそれはほぼ男性化された女性で、男性の企業戦士と同じように多くのことを犠牲にして仕事に打ち

込んだ女性の場合が多かったです。もちろんそれも一つの生き方だし、そういう人たちがすばらしい仕事をされてきたのは私も良く知っているのですが、ずっとこのままいいのだろうか。
いいのだろうかと思わせられる理由は、この点は建設産業と少し似ているかもしれないが、若い人が就職のときにマスコミ企業を選んでくれ

いに決まっているのですが、実は2番目に問題なのはそういう働き方をしている世の中のことが良く分からなくなるわけです。
私たちは親の介護をし、子どもを育て、買い物に行き、町内会のことに関わり、生活者としていろんなことを体験しています。多くの読者はそういう経験を持ちながら世の中のことを見ている。ところが介護も子育ても買い物も町内会も趣味の時間も全く持たないで24時間会社の中にいる人が、そういう生活者に刺さる記事が書けるのか、そういうニュースができるのかとい

軍隊組織に近い 過労死事件も起きた

私の知り合いで先輩の女性の記者が朝日新聞に長く勤めていて、今はフリーになった人ですが、先輩の男性記者から「君ね、女は新聞記者になれないんだよ」と言われ、女性の新聞記者を前にこのおじさん何を言っているのかと思

長時間労働で世の中分かんず
さらに新聞記者は長時間過重労働が当たり前とされていた時代がとて長く続きました。実際、過労死事件もあり、組合でも過労死裁判に取り組みました。何が正しいかと言うと一番正しいのは本人や家族にとって健康を損なうし、

なくなっている。人気ランキングが落ちているということが顕著です。もう一つはせっかく入ったのに3年くらいでやめてしまう。あるいは1年くらいでやめる人も多くいます。「近頃の若い者は根性がない。昔は兵隊と言われて寝ずにがんばったんだ」という人もいますが、そういう時代ではありません。メディアの中でも適切に働き方改革を進めて、若い人が希望をもって働ける産業にすることが絶対に必要で、それは働く仲間にとっても必要だし、より良いニュースを読者・視聴者に届けるためにも欠かせません。